

日本語教師の「教育観」「教師観」の更新を目指して

— 中国の高等教育機関で日本語教育に携わった教師たちの実践から —

早稲田大学大学院日本語教育研究科修士課程 冨永祐子

問題意識

海外において、日本語教師の教育機関での役割が日本語母語話者か、非母語話者かで規定される裏には、ある価値観が存在し、その既成の概念に捉われる教師の言語教育は、ある価値観を再生産しているのではないだろうか。

研究目的

「日本語教師であること」を問い直し、教育機関にどのように関わっていくのかを再考する契機となることを目指す。

先行研究

口教師に関する言説（佐藤 1997）

規範的接近

(ought to approach)

「教師は
いかにあるべきか」

生成的〈教育的〉接近

(be coming a teacher
/educating a teacher approach)

「いかにして教師に
なるか〈養成するか〉」

存在論的接近

(ontological approach)

「教師であること」

- ネイティブ教師に求められる資質（平畑 2008）
- 中国で求められる日本人像（春口 2011）
- NS教師、NNS教師の役割（岡 2006）
- NS教師NNS教師のチームティーチングの意義（岡本 2010）
- 新人日本語教師（牛窪 2013）
- 教師の成長（飯野 2009） ほか

※NS：日本語母語話者 NNS：日本語非母語話者

『教師であることは何を意味しているのか』
『なぜ、私（あなた）は教師なのか』佐藤（1997）
（教師であると言えるのか：筆者）

本研究の概要

〈目的〉以下の2点を明らかにする

RQ1：

日本語教師は自らの存在をどのように捉えているのか

RQ2：

実践を通して、RQ1はどのように再構築していくのか

〈対象〉

- ・中国の高等教育機関で
日本語教育に携わった教師4名
（筆者含む）

〈研究方法〉

- ・「教師であること」を語り合う
アクションリサーチ（実践）と
そのプロセスの分析

〈理論的枠組み〉

H. ブルーマー（1969）：象徴的相互行為論

前提①人間は、ものごとが自分にとってもつ意味に応じて行為する

前提②そのものごとの意味は、当人と他の人びととの間で行われる社会的相互行為から生じる

前提③それらの意味はものごとを処理する解釈過程の中で取り扱われ、修正される

〈結果と考察：実践の一部より〉

第1回テーマ：自分史を語る

対象者A：

日本語への理解の深まりと日本語との関係の変化

対象者B：言語としての日本語への興味

対象者C：相互的な国際交流への興味

対象者D：日本語と仕事

第一回の語り合いの場において、「日本語」「日本語教育」との出会いがそれぞれの「教師観」「教育観」に影響を与えていることが明らかとなった。

〈先行研究〉

飯野令子（2009）. 日本語教師の「成長」の捉え方を問う—教師のアイデンティティの変容と実践共同体の発展から—『早稲田日本語教育学』5, 1-14.

牛窪隆太（2013）「新人日本語教師の教育機関への参加に関する考察—ナラティブ・アプローチによる事例研究」『言語文化教育研究』11

岡真理子（2006）「海外で期待される教師像とは—日本語教育専門家海外へ派遣する視点から—」『海外で日本語を教える—ネイティブ日本語教師への期待—』凡人社 pp133-139
岡本和恵（2010）「『ネイティブ』教師・『ノンネイティブ』教師の意識と実践」『阪大日本語研究』22 pp205-235

佐藤学（1997）『教師というアポリアー—反省的实践へ—』平畑奈美（2008）「アジアにおける母語話者日本語教師の新たな役割」『世界の日本語教育』18

春口淳一（2011）「中国で求められる日本人日本語教師像—副専攻としての日本語教員養成講座の今後の課題—」『長崎外大論叢』第15号, pp69-82

ウヴェ・フリック（2011）『質的研究入門』pp68-69

*H. ブルーマー 著；後藤将之 訳（1991）『シンボリック相互作用論：パースペクティブと方法』